

## 織田作之助書簡における吉井栄治

小笠原 輝

氏宛」の四名である。順番に見ていく。

杉山平一（一九一四～二〇二二）は、織田作之助・吉井栄治らが同人であった同人誌『海風』の同人のひとりである。原稿の送付先として吉井の名前が見え、『海風』の編集者として吉井が原稿を取りまとめていたことがわかる。そんな吉井の編集者としての顔がもっとも強く見えるのが、昭和十五年五月六日の葉書である。「夫婦善哉」は吉井が独断で推薦したのだった。投票する予定のところ期日がなくてそうしたことと、青山には気の毒だが結果としては海風の評判がよくなった。九州文学などに勝って快適だった。<sup>1</sup>「夫婦善哉」は、『改造』が主催した第一回「文藝推薦」作品となったのであるが、『海風』が「夫婦善哉」を推薦したのは吉井栄治の独断であったことがこの書簡で触れられている。

吉井栄治（一九一三～没年不詳）<sup>1</sup>は、将棋界においては朝日新聞社の将棋記者として、また、観戦記者として名を残している。観戦記者としては、『朝日新聞』において「栄」の名義で名人戦の観戦記を九本、順位戦の観戦記を六十二本。『週刊文春』において本名で名将戦の観戦記を十八本書いた。そんな吉井は元々作家志望であり、「北風」「微笑」の二作品で第二十三回直木賞の候補となっている。なかでも「北風」は、関西の将棋界を題材にした将棋小説である。そんな将棋と文学とを行き来した吉井の人物像を、今回は大阪府立高津中学の同級であった織田作之助（一九一三～一九四七）の書簡から感じ取りたい。

『定本織田作之助全集第八巻』（文泉堂書店、一九七六年）に収録されている書簡において、吉井が出てくる書簡が残っているのは「杉山平一氏宛」「白崎礼三氏宛」「品川力氏宛」「吉井栄治

編集者としての吉井だけでなく、昭和十六年八月二日の封書では吉井の小説の話もしている。しかし、「吉井の小説、しかし、まえよりはみました。あの甘さは相かわらずだが。」<sup>3</sup>と厳しめの評価をしている。

また、織田と吉井は遊び仲間でもあり、一緒に競馬に行った話も出てくる。杉山と吉井との接点としては、昭和二十年五月十日に瀬川健一郎を含めた四人で会う話がある。この頃にはもう本格的な本土空襲が始まっていて、翌日の十一日では芹屋で

も初めての空襲があった。そんな状況でも、語るのを楽しみに四人は集まっている。織田と吉井は「小説の話をする。レコードを聞く。将棋を指す。それで一日が過ぎていった」<sup>4</sup>という関係であったようだが、四人で会ったこの時は将棋を指していたのだろうか。

次の白崎礼三（一九一四～一九四四）もまた、『海風』の同人である。「吉井が今上京している筈で、原稿持っていったらどうか」<sup>5</sup>。この昭和十四年六月五日差出書簡に出てくる原稿は『海風』六号の話で、同号には吉井の小説が掲載されていないため、結局この原稿はボツになったようである。織田が吉井のことを心配していたことが分かる書簡である。昭和十九年に亡くなっており昭和二十年の杉山らとのエピソードには出て来ないが、白崎と吉井にも親交があったことが窺わせる。

三人目の品川力（一九〇四～二〇〇六）は、『海風』の発行を引き受けた人物である。書簡では『海風』の編集に関する話が主である。「海風、綺麗に出来ました吉井の努力を多とすべきです」<sup>6</sup>。「吉井栄治君応召し、海風は原稿整理その他ほか編輯しますが、何分大阪にいることゆえ、いろいろ貴兄をわずらわすこと多いと思います。よろしく」<sup>7</sup>といったように、『海風』が綺麗できたのは吉井の努力であること、また、吉井が応召されたため織田が『海風』の編集をするとあり、『海風』の編

集者としての吉井の顔が強く窺える。昭和十七年七月十二日書簡においては、品川の結婚話に合わせて、吉井が結婚したことにも言及されている。吉井はこの時期に結婚したようである。

そして最後は吉井栄治本人宛の書簡である。昭和十五年五月四日夜に書かれた封書は、『海風』七号に掲載された「悲しければこそ」の評が中心となっている。

手紙ありがとう。海風昨日ついた。綺麗に出来た。君の努力を多とする。なお印刷費のこと、どういう風にしたものか良い知恵もないがコンクールの賞金でもそれにあてるより致方ない。一頁ずつ、たとえば十頁の人は十円、二十頁の人は二十円というように出すという方法もある、白崎、中谷ともよく相談してくれ。暫く印刷屋に待って貰うことだね。

ぼくもお金がいいたらちびちび送ることにする。君の小説、よんだ。前半たいへんよくなっている。鮮かにすべり出している。後半もう一工夫要するところだ。よんでいたいへん愉しかった。君の気持はよく分る。

そしてこれより外に書き方もないことは分る。そしてまた君がこの材料をこういう風にあっさり書いたこと、えらいと思う。が、矢張り、小説として立派に玄人と太刀打ちして行くためにはもつときびしい眼が必要だ。

M子に向けられた眼はよいが、「私」には眼は光っていない。これが欠点だ。

最後の四行、たいへん立派だ。之ではつきりと完結している。その他の諸氏の作品の批評は中谷白崎に出した手紙で詳しく書いたが、少し書いてみると、中谷——茂木茂十がよく書いている。が「私」に対するきびしい批評の眼がない。ゆえに自然発露的なスタイルの良さに止っている。近代文学乃至小説の特徴は作者が何を考え、何を印象づけられ、何を悩んでいるかを書くにあることは勿論のことであるが、しかしこれらは小説家だけが考えることではない。

という意味は、つまり、小説家は自分のうけた印象をそのまま書いてよいという特権は与えられていない。文学をやる人だけが何を考え、何を書いてもよいというのでは、文学をやらぬ人はどうなるか。いい方を少しかえると小説家は何を考え、何を書いてもよいという特権を与えられる代りに、その特権に対しては残酷な復讐をうけねばならぬ。そしてその復讐が大きき傷手とならぬためには小説家は武装しなければならぬ。その武装をば小説家は忍術を使わねばならぬということ。

つまり自分の姿を消すために、忍術の極意を修業し掴得することにある。

冒頭で『海風』の印刷費の相談をしており、吉井は編集者として同人誌の会計を担当していたようである。ここでも、吉井の編集者としての顔が見える。また、吉井の小説評を詳細に書いている。

「悲しければこそ」は「私」とM子の恋物語である。帝大の文科を出て小説家を目指している「私」(プロフィールは吉井本人に近い)が銀座のサロンの女給であったM子と出会ったところから始まり、M子が誘って始まった旅行先で起こったM子の自殺騒動が話の中心となっている。「私」とM子、それぞれが人生の悩みのそれに伴う自死に向き合っていて、それが作品のテーマと考えられる。

織田が指摘するように、M子の人物像や、M子の動機は分かりやすい。小説家志望の年下の男に惚れたが、自らはケー・フジハラという別の男に面倒を見てもらっている。それを「私」に話せない後ろめたさや、親が死に身寄りがなく女給として働いている自分と実家が裕福な小説家志望の「私」との環境の差。そしてM子と「私」の間の愛情の熱量の差。自殺を図る手紙を残すM子の心情を、丁寧に描いている。また、「私」からの愛情を確認した途端に旅行を中止して将来の計画を建てるなど現実的なたくましさを見せており、それが物語のリアリティとなっている。

織田が褒めている最後の四行は、帰りに寄った土産物屋で老婆に「奥さま」と声をかけられたM子が嬉しくなり、必要以上にたくさんの買物をした、というものである。旅行を通じて揺れ動いた「私」とM子の感情を最後に現実を引き戻し、将来に対する「私」の苦悩をほのかに残して物語を完結させている。

そのようなM子関連の描写に対して、「私」の描写はとても薄い。「私」がM子と付き合い始めた動機は語られない。「私」がM子を愛しているかどうかは読者には分からないまま話は進む。「人間、いつかは、ひとりぼっちになるものだ」「人間の心つてやつには、僕はもう、愛想をつかしたよ」「死といものに、断えずひきつけられてゐた私」<sup>10</sup>といった、「私」が持つ厭世観の背景にも言及がない。M子が愛情の告白と自殺することを書いた封書を読み、「愛情と死と。死を賭する愛。これだ。これだ。長い間、私が求めてゐたのは。」<sup>11</sup>と「私」は初めて感情をあらわにするのであるが、「私」がそう思うに至るまでの「私」の心の揺れ動きを、まったく描けていない。織田が言うように、「私」に対するきびしい眼がない。ゆえに、作品の主題であろう人生の苦悩と死がほやけてしまい、「自然発露的なスタイルの良さに止って」しまっている。

師と仰いだ藤沢桓夫が亡くなった際に書いた追悼文で、吉井は「若い頃の文学の仲間たちの中には、人生の苦悩に耐えきれ

ずに夭折した者も幾人かあった。(中略)もし先生の温かい加護がなかったら、おそらく彼等と同じ運命を辿っていたであろう」<sup>12</sup>と書いており、「悲しければこそ」を書いた時期の吉井にとつて、人生の苦悩と死は大きなテーマであったと考えられる。織田の言う「君の気持はよく分る」というのも、自殺していった文学の仲間を念頭に置いてのものであろう。が、「悲しければこそ」は、そのテーマをただ提示しただけで終わってしまったっており、作品として読者を惹きつける所まで至っていない。織田の指摘は、吉井に鋭く突き刺さったのではないだろうか。「小説家は自分のうけた印象をそのまま書いてよいという特権は与えられていない」「自分の姿を消すために、忍術の極意を修行し掴得することにある」とする織田の小説論は、友人として吉井の奮起を促したものであろう。『海風』の同号で「悲しければこそ」に続いて掲載されたのが「夫婦善哉」である。この時、織田と吉井は小説家として大きく差が開いてしまった。

全体を通して眺めて見ると、友人として応援はしているが、吉井の書いた小説に対する評は辛い。それに対して、『海風』の編集者としての吉井を高く評価している。織田にとつて吉井は、良き友人であり、良き編集者であったと言える。

また、残っている書簡は、「夫婦善哉」発表前後のものが多い。「夫婦善哉」が第一回文藝推薦作品となった際に書いた「感

想」では、藤沢桓夫と将棋を指した話から始まる。そして「手のない時は端の歩を突けて、私の「夫婦善哉」は自玉の端の歩を突いたやうな小説で、手がなかつたのである。」<sup>13</sup>というように、将棋を比喩として使つて受賞の言葉を書いている。織田作之助と小説と将棋と言うと「可能性の文学」が知られるが、夫婦善哉時点でも端歩を使いながら小説と将棋とを結びつけている。そんな言及がある時期に書簡で吉井の言及が多いことは、将棋仲間であつた吉井の存在感が当時織田にあつたことを窺わせる。

前述した通り、「夫婦善哉」は吉井が独断で推薦し、コンクール賞を取つた作品である。織田が世に知れ渡るきっかけとなつたその代表作は、吉井によつて世に広まつた。そういう意味で、織田が評価するように吉井には編集者としての素質があつた。結局吉井は作家としては筆を置き朝日新聞社の学芸部員として定年まで勤めることになるが、そのような吉井の姿を織田は見守っていたのかもしれない。

1 吉井の没年は明らかになつていないが、川口則弘氏の調査で、吉井が同人であつた『文学雑誌』63号の「編集後記」において、「なお、昨年は藤沢桓夫氏を失つたあと、本誌の同人で織田作之助の親友だつた瀬川健一郎さんと吉井栄治さんが急逝され」とあり、没年は一九九〇年と推定できる。(ご教示いただきありがとうございます。)

2 織田作之助『定本織田作之助全集第八巻』文泉堂書店、一九七六年、四二二頁

3 織田作之助、一九七六年、四一五頁

4 吉井栄治『名棋士名局集 付・盤側棋談』弘文社、一九七四年、三〇五頁

5 織田作之助、一九七六年、四五六頁

6 織田作之助、一九七六年、四五二頁

7 織田作之助、一九七六年、四五五頁

8 織田作之助『定本織田作之助全集第八巻』文泉堂書店、一九七六年、四五六―四五八頁

9 吉井栄治「悲しかればこそ」『海風』一九四〇年四月号、九八頁

10 吉井栄治、一九四〇年、百頁

11 吉井栄治、一九四〇年、百頁

12 吉井栄治「不肖の弟子」『文学雑誌』六一号、七四頁

13 織田作之助「感想」『文藝』一九四〇年七月号、二二九頁